

死に水を取られるか——このほうがむしろ彼にふさわしかつた。

(画家)

音の綴り方教室

中村滋延

去年の十二月九日から十六日までの一週間にわたって、「日独週間——文化の出会い」が大阪で催された。大阪ドイツ文化センターの主催によるもので、美術展、映画、ビデオアート、演劇、音楽会、シンボジウムなどの催しが、同センターを中心とした場所で行なわれた。

その一環として、最終日にあたる十六日には、私が企画の中心について「ワークショップ——現代音楽の記譜法」を催した。

新しい記譜法を通して、現代音楽を考える。これがこの企画のねらいである。

特徴のある記譜法をスライドで示し、それについて私が説明をする。それからその作品をコードで聴いてみる。これが第一部。次

の第二部では、二人の作曲家（塙見允枝子さんと私）と尺八奏者（酒井保氏）がそれぞれ自作の記譜法について、スライドで例を示しながら講演を行ない、その後で実演によってその作品を聴いてみる。このような形で私はワークショップを進めていき、最後に、講演者と聴衆との間でディスカッションを行なつた。会場には、第一部と第二部を通して、その日に聴くはずである曲の楽譜を全てペネルで展示した。その上に塙見さんと私のコレクションの中から、多数の現代音楽の楽譜やそれに関する書籍なども並べ、このワークショップの参加者が自由にそれらを見ることができるようにもしておいた。

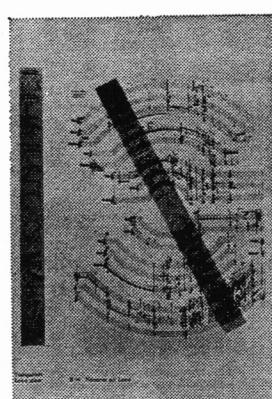
私は第一部を専門家（主に作曲家や現代音楽をレバートリーにしている演奏家などのためのものとして考えていたから、もっぱら現代音楽の記譜法に関する情報だけを与えるつもりだった。ところが予想外に多くの聴衆が第一部の冒頭から集まつたため、私としては専門的な解説を行なつて良いものかどうか、少しとまどつた。しかし私のとまどいとは関係なく、聴衆はか

なり積極的に興味を示した。現代音楽の楽譜の多くは、従来の定量五線記譜法の枠を越えて、新しい記号や図形の組み合わせで記譜されている。ひとつには、その造形的な美しさだけでも、聴衆の興味を引くのに充分であったからかも知れない。「この楽譜を展览に出したら、入選する」と聴衆の中のひとりの画家が言ったほどだ。また「この記号と、この音のイメージはどうも合わないようですね」と言いながら、音楽と楽譜との関係を、音とその視覚的なイメージの関係に置き換えて楽しんでいる聴衆もいた。だが結局のところ、初めての経験がもたらした新鮮な驚きが、私の専門的な解説の難解さにもかかわらず、聴衆の現代音楽の記譜法についての興味を持続させた原因であつたといえるだろう。つまり、「この新しい記譜法で書かれた楽譜、今まで見たこともないような楽譜か

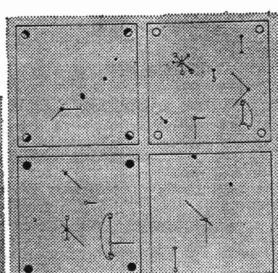
ら、一体どのような音が実際に鳴るのかしら」ということが興味の中心になつていたようだ。

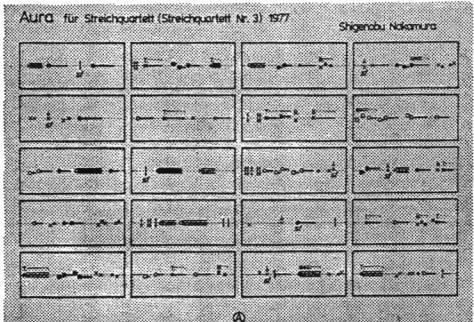
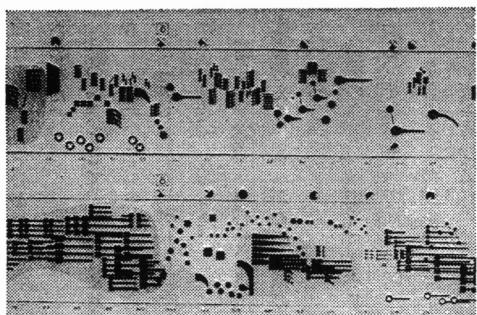
第二部では事情が少し異なつてくる。記譜法に関する単なる情報の提供ではない。作曲者が自作の

記譜法について、それ以外の方法では記譜できなかつた絵画を中心とする。それによつて、聴衆の興味の中心は「この新しい記譜法から、どのような音が実際に鳴るのかしら」といつた、単純で身のから、もっと別なものに変わつた。たとえば私の講演の後で、「あなたのやつていることだつたら、ふつうの五線とオタマジャクシでも書けるはずでしよう。どうして楽譜のしかけや記号に対する長い説明をつけてまでも、そんな見なれない記譜法で書かねばならないのです」



現代音楽の記譜の一例 一柳慧「ピアノ作品2番」
(右)とシュトックハウゼン「ルフラン」の楽譜





リゲティ「アーティキュレーション」(上)と
中村滋延「アウラ」の楽譜

音の新しいシステム作りのみに興味があり、そのためにも新しい記譜法を考え出す必要があります。そのことも情緒の動きがあるからできるのです」

この最後の質問をした人も含めて、このワークショップでは、聴衆はそれぞれの次元で、記譜法を

媒介として現代音楽について考えさせられたはずだ。それを受け入れるにしても、拒否するにして

書きっぱなし、弾きっぱなし、

聴きっぱなしの多い中で、アーティケアを考えたこのような企画はそれなりに意味のあるものであつた」という、ある批評家の言葉が、私の意図を代弁している。

(作曲家)

「あなたはそのような新しい記譜法で何を表現しようとしているのですか。あなたはもっぱら音の新しいシステム作りのみに関心があるように思われます。そこには情緒の表出に対しても全く意が用いらなされていいる。」「今度から、それがどんな記譜法で書かれているかについて想像することも、現代音楽を聞くひとつものを持っていません。もっぱら

ルのコンサートは既に始まっていた。「第八回インド音楽研究の旅」に参加してカルカッタに来たもの、滞在は一晩だけ、翌朝には香港に向けて発つ予定だった。その上バクドグラからの飛行機が約二時間遅れたため、以前から約束していたバウル(ベンガル地方の大音楽家の)ブルナ・ダース氏と連絡をとることもできず、カルカッタではあまり音楽を聞く機会はないのかと、なかばあきらめかけていた。そこへ「シャンカルのコンサートがある」という知らせである。教えてくれたのはこの地でシタールを勉強しているYさんといふ日本人。シャンカルと面識のある同行の二人、KさんとMさんは早速駆けつけることに決めた。

R・シャンカル
ヒタクシー

本当に把握しやすいですね」
「なるほど、こんな複雑な響も、こんなに簡潔明瞭に記譜することもできるんですね。これだから

「私だったら、そこにはもっと別の図形を使いますよ。その記号は見にくいくらい、やめた方がいいなあ」

の大きな楽しみになりそうですよ」と語ってくれた私の友人がいた。

しかし聴衆の中には、私の音楽や記譜法についての話などを全然受けつけない人もいて、次のように質問する。

「あなたはそのような新しい記譜法で何を表現しようとしているのですか。あなたはもっぱら音の新しいシステム作りのみに関心があるように思われます。そこには情緒の表出に対しても全く意が用いられていないように思われますが」

私は答えるを得ない。

「私は表現しようとする具体的な

一月四日、私はカルカッタのタクシーの中でイライラしていた。目指すはカラマンディア・ホール、七時開演のラヴィ・シャンカル

のコンサートは既に始まっていた。「第八回インド音楽研究の旅」に参加してカルカッタに来たもの、滞在は一晩だけ、翌朝には香港に向けて発つ予定だった。その上バクドグラからの飛行機が約二時間遅れたため、以前から約束していたバウル(ベンガル地方の大音楽家の)ブルナ・ダース氏と連絡をとることもできず、カルカッタではあまり音楽を聞く機会はないのかと、なかばあきらめかけていた。そこへ「シャンカルのコンサートがある」という知らせである。教えてくれたのはこの地でシタールを勉強しているYさんといふ日本人。シャンカルと面識のある同行の二人、KさんとMさんは早速駆けつけることに決めた。

R・シャンカル
ヒタクシー

ラヴィ・シャンカルはあらためて説明するまでもなく、インドの天才的シタール奏者であるだけでなく、インド音楽を一国の伝統音楽といううせまい枠から、インター・ナショナルな場へ紹介した二十世纪の偉人の一人である。音楽ファンならずとも名前くらいは知つておられるだろう。現在彼は、世界各地に五つの家を持ち、二年先まで予定が決まっている猛烈に忙し